

令和二年度

国語問題（L）

前期日程

〔注意〕

- 1 問題冊子および解答用冊子は、試験開始の合図があるまで開いてはいけない。
- 2 受験番号は、解答用紙の受験番号欄（計八か所）に正確に記入すること。
- 3 問題冊子のページ数は、表紙をのぞき十二ページである。脱落している場合は、ただちに申し出ること。
- 4 解答用紙は四枚である。解答用紙をミシン目に従って切り離すこと。
- 5 解答は、解答用紙の指定されたところに記入すること。
- 6 問題冊子の余白は適宜下書きに使用してよい。
- 7 解答用紙は持ち帰ってはいけない。
- 8 問題冊子は持ち帰ること。

I

次の文章は、近現代東アジアにおける美術を、文化的な「境界侵犯」という観点から論じたもので、中国系の現代アーティスト、シュー・ビンによる、漢字に似た創作文字を用いた書の作品をとりあげています。これを読んで後の問いに答えなさい。

シュー・ビンの書は、中華文明が公認してきた漢字体系からみれば、公然たる贋作^{がね}にして擬態にすぎぬという限りで、自らの創意出自の偽モノ性を憚^{はか}らず公言する。彼はまず一方では、自らの創作が偽物であることを、ほかでもない中国の公衆に対して包み隠さず訴える。実際、漢字文明圏の成員であれば、誰しも容易に、シュー・ビンの漢字が偽物でしかないことは見抜けるはずである（それが、漢字文明圏の成員の証にすらなりえる）。ところがそのうえで、彼の作品は、もっぱら西側世界の観客を標的としている。それは、彼の文字を解読できないことを前提とした観客である。むしろ西側世界の観客とても、シュー・ビンの「漢字」が漢字としては解読不可能なことくらい、知識としては知っていよう。だがそうした観衆には、彼の創意工夫による偽文字が判読不可能であるという事実を判読する能力が、原則的には想定されていない。言い換えれば、^(a)解読できない偽文字であることを見抜けない人々こそが、好適な顧客なのだ。たしかに彼らは「文盲」なのだが、彼ら自身は、シュー・ビンの作品を前にして、いかに自分たちが「文盲」なのか理解できない。

となれば、シュー・ビンは、一種の確信犯だといえるだろう。というのも彼は、自らの贋作漢字あるいは紛^{まが}い物の漢字を公衆に対して展示するにあたって、自分が公衆を欺^{あざわ}いていることに自覚的だからだ。それなら、この紛^{まが}い物が功を奏するのは何故なのか。それは「自分たちがいかに欺^{あざわ}かれているかを理解できない人々」を騙^{だま}しているだけでなく、それよりも大切なこととして、「自分たちが拒^きがれていることを重々承知している人々」をも、シュー・ビンが^(b)抜け目なく、味方に取り込んでしまっている、という周到さにあるはずだ。

それにくわえて、昨今ではシュー・ビンは自分の偽漢字は学習すれば読解できるし、習得することだって可能だと言いつて始めている。実際彼は、自分の創作した文字を、漢字という表意文字の構成原理に則^{したが}って増幅させている。基本的な部首を組み合わせることで、漢字は新たな語義を獲得し、それを伝達する自己組成の力学を蔵^{かく}れている。この漢字ならではの機動性を頼りに、シュー・ビンは自らの偽文字をブラッシュアップ^(brush up)し、ヴァージョン・アップ^(version up)した。は

たしてその成果は、正統なものとして認証されるのだろうか。だがそれは、将来における社会的な認知の問題であって、作者本人が全面的に責任を負う筋合いのものではあるまい。当初の海賊行為（というのも、それは、社会的な認知を得ない、偽金造りならぬ「偽文字造り」だったのだから）が少しずつ権威を帯び、最後には社会において、代替的なコードとして、まっとうに伝播循環されるに至る。そうした経緯を見事に擬態して演じたひとつの好例を、シュール・ビンに見ることも許されるだろう。

実際、歴史を振り返ると、同様の新字体創作は漢字文明圏の周縁部において、何度となく繰り返されてきた。シュール・ビン発案の字体に近いものから見るならば、契丹文字（九二〇年頃に制定）^{*}や、西夏文字（一〇三六年頃に制定）^{*}あるいは女真文字（一一九二年に制定）^{*}は、北方の遊牧民族によって、中原の漢字文化圏への対抗を意図して発明されたものと見て、間違いないだろう。不必要なまでに複雑な文字構成からは、北方騎馬民族の中華の民に対する屈曲した劣性複合を読み取りたくなる。だが、これらの「偽」漢字は、王朝によって正統なる文字とのお墨付きを得るや、公式な国事文書において、大千を振って使われるようになる。

その経緯や形態は様々だが、そこには周縁文化圏の中央に対する、抵抗の様子を読み取ってもよからう。日本におけるカタカナやひらがなも例外ではない。前者は漢字の部首の一部、後者は略字草書体を利用して表音文字を創案したものだ^{*}が、これは漢字では表記に不便な地域言語を擁護することにつながった。正規の漢文に対しては、補助的・従属的な役割に甘んじた^{*}が、女性の使用者たちは、やがて日本を代表する文学の書き手となる。李氏朝鮮の世宗による訓民正音の制定（四四六年）^{*}は、世界でも稀な、あるいは唯一の完全に人工的な表音字母の開発といえる。ハングルもまた長らくのあいだ、表向きの漢字使用に対して従属的な位置にあったが、半島の民族主義が高まると、その受け皿として正統性を獲得し、やがては漢字排斥の根拠とされるまでの民族的矜持を託され、誇り高い地位を授けられる。だが、これらはいずれも、中華主義の立場から評定すれば、しよせん周縁辺境地帯の「偽文字」として遇されても仕方のない、文化的劣位の表徴に他ならなかったはずである。

（稲賀繁美『絵画の臨界——近代東アジア美術史の極端と命運——』により、一部改変）

＊契丹文字——現在の中国東北部からモンゴル高原までの地域を支配した契丹（キタイ）で作られた文字。

＊西夏文字——現在の中国西北部を支配した西夏王国で作られた文字。

＊女真文字——現在の中国東北部に女真族が建国した金王朝で作られた文字。

＊中原——辺境に対する中央。中華文明の中心地。

＊訓民正音——朝鮮語を表記するために作られた表音文字ハングルの古称。

問一 傍線部(a)について、なぜ「解説できない偽文字であることを見抜けない人々こそが、好適な顧客なのだ」といえるのか、説明しなさい。

問二 傍線部(b)の「抜け目なく、味方に取り込んでしまっている、という周到さ」とはどういうことか、説明しなさい。

問三 傍線部(c)の「そうした経緯を見事に擬態して演じた」とはどういうことか、何が何を「演じて」いるのかを示しながら説明しなさい。

問四 本文で述べられるアジアの新字体創作の文化的特徴について、傍線部(d)の「屈曲した劣性複合」という観点から説明しなさい。なお「劣性複合 (inferiority complex)」とは、「優越感と複合した劣等感」といった意味で使われている。

II

次の文章は、島本健作の小説『バナナの皮』（一九三五年発表）の一部です。五月末のある日、上野駅から汽車に乗ろうとしていた「私」は、護送されている囚人を見かけます。客車に乗りこむと、「私」と向かい合った席にその囚人が役人（看守）と共にやつてきます。これを読んで後の問いに答えなさい。なお、本文は一部改変したところがあります。

囚人は窓ぎわに座り、役人はその横に座ったから、私と囚人とは膝をつきあわすほどにして顔を合せたわけである。彼は座ると同時に、編笠をとり、朝の光りにみちた窓外に向いてまぶしそうに目をまたいた。さわやかな風に面を吹かれ、着ものの上からそれとわかるほどに胸をふくらませ、また大きく息を吐き出すのだった。私はそういう境遇にある人にたいする特別な見方をもってではなく、普通の人間にたいするように彼の顔を正視した。まだ若い青年だった。はじめてそのうしろ姿を一瞥したとき、しつかりした骨組にもかかわらず、肩のあたりの線に、どこかまだ一人前になりきらぬ、初々しいものを見たのであるが、それをそのまま裏書するような実際の彼の若さであった。皮膚は荒れ、このような生活にあるものに特有な、澱んだ汚水のような色艶だったが、光り失われぬ黒く澄んだ眼は、検査をすぎてまだ間のない頃のものをおもわせた。かすかに口を開き、そのときはもう動き出した汽車の窓外に、刻一刻かわって行く風物にうつとりみとれているさまは、あどけないものをさえ含んでいる。ふいに彼は小刻みに膝をひよいひよいと動かしはじめた。今の彼としてほかに表現し得ない心の喜びなのであろう。太く冷たい鉄の千錠のしかと喰い込んでいる双の手首が、その膝の動きにつれて無心にかすかにふるえている。……

気がついてみると、しかし、彼の存在に心をとられているのは決して私一人ではなかった。この車内にある大半のものがそうであったといえる。彼がはいって来た当座、おびえたように身をすくめたものたちも、自分たちの座席から遠くはなれた今の彼を見るときは、安堵の胸をなでおろすと同時に、好奇心が頭をもちあげて来たようである。用もないのにぶらぶら私たちのそば近くあるいて来、じろじろと彼を見て、それから帰って行くものがあつた。多くはただ物珍しそうな、罪のない眼いろであつたが、なかにははげしい憎悪に燃えて、生き身の皮まではぎ取りそうな、無慈悲な眼つきで見据えるものもあつた。私

たちとは別の側に、はすかに席をしめていた、四十歳前後の親方ふうの男など、そのうちの主な一人であった。おそらくは土木請負師などのたぐいであろう、大兵肥満の洋服姿で、赤皮の編上げをはき、ズボンの裾は靴下のなかにおしこんで、靴下止めを上からしていた。右手に一つ、左手に二つ金の指輪をはめ、はっはつと大口あけてわらう時の口のなかもお神楽の獅子にそっくりなら、胸間にぶら下げている金の鎖の太さもみなみのものとはおもわれぬ。彼は六つか七つぐらいの男の児をひとり連れていた。子供は父親の膝の上にて、甘えている。かの囚人の方にちらりと眼をくれ、子供らしく誇張した表情で、おびえたように父親の胸に顔をうずめ、足をばたばたさせるのであった。父親は幅広く厚い胸でがつしりと子供をさええ、あたりのもののふりむいてみるほどの大ごえをあげてわらうのである。

「こわくない、こわくない、何がこわいもんかい、お父さんがついてらあな。」

子供は父親の首に両手をまきつけて、耳もとに口をよせ、ひそひそとなにかさやいた。

「うん、うん、わるいことさせなんだら何もこわいことアありやしない。わるいことをすりやな、おまわりさんがしばつてつれてつて、あんな着ものを着にやらんぞ。何？　どんなわるいこと？　はっはっ、そりや坊や、いろいろあらあな。どるぼう、火つけ、人ごろし……」

私はおもわずはつとして、なにか、自分に直接関することでもあるように、顔いろをかえた。とつさの間、私は目の前のかの囚人の顔を正視する勇気を失った。しかし、私はおもい切って見たのである。「どろぼう、火つけ、人ごろし……」のこえがひびいたとき、今まで窓の外ばかり見ていたわかもものは、ぎくりとしたふうで、こえのする方をちらりと見た。すぐにもとへ顔をかえしたが、一瞬のうちにその顔は、今までとはまるでべつなものになってしまっていた。今までのあどけない、子供らしさは影を消して、急にいくつか年をとった、萎んだものになっていた。暗く陰惨な、典型的な囚人のそれに変っていたのである。心を鎮めようとし、依然、窓の外を見ているが、手の指先は、それとあきらかに見えるほど、ぶるぶるふるえているのだった。……

私も亦、読もうとひろげた新聞を持つ手のふるえのどうにもとどまらぬ感情の荒立ちをおぼえたのである。私はかの田舎紳

士をにくんだ。その肥えふとつた胴体を踏みにしてやりたい切ない衝動に身をおいた。たつた一つ、——若い囚人の顔に今が今までうかんでいた、ちようどこの五月の季節のように、明るく朗らかな表情を、一瞬のうちに萎えしぼませてしまった、——はげしい毒素のような、彼のその一言のためにである。私はこの年若い囚人が、何の罪で、何年の刑期で、どこへ送られて行くかを知らぬ。しかしながら私は、ついさっきまで彼の顔にうかんでいたような表情が、このような生活にあるものの上に、容易に見得るものではないことをよく知っている。それは一年に一度か、二年に一度、何かの折にひよいとやってくる程度のものである。その生活にあるあいだじゅう、何年居ろうと、ついにそういうことのない不幸なものもある。囚われている人間であることを、全く忘れている瞬間でないならば、そういう表情が彼の上にあらわれるということはないのである。

どのくらい時間がたつた。側につきそっていた役人は、その時、時間を見、囚人をうながし立たしめた。ここにあつてもちゃんと時間をきめてするらしい不淨場へ行く時が来たのである。囚人は気のすすまぬふうに立つてあるきだした。向うはしの不淨場の前で、手錠の鍵をはずしてもらい、そこにあるあいだ、役人はその前に立つて待つのであつた。用をすました囚人は、ふたたび手錠に腰縄姿でこつちへあるいて来た。車内の人々は一せいに彼に鋭い視線を放つた。⁽³⁾幾十の射るような視線に裸にされ、何よりもさきに蒙つた心の痛手があつて、若ものはおどおどし、足もとどこかたよりなげだつた。

さきの請負師ふうの田舎紳士と、子供は、そのときはもう、一向そしらぬふうに、バスケットを下し、果物やら、菓子やらにさかんにバクついていた。ふりかえつて、近づいて来るわかものをじろりと見た男は、今喰い終つたバナナの皮を、通り路にすてたのである。すてられたバナナの皮は、ちようど通路のまんなかにおちた。紳士はなんの気もなく、ただ無造作にすてたのかも知れぬ。しかし、横をむいてにやりとわらつた顔の卑しさにはなにかを期待して心にほくそ笑んでいるところがあり、見ていた私は、おもわずはつと緊張した。何か起りそうな予感にわれ知らず腰をうかせていた。すると、その瞬間だつた。ちようどそこまで来た囚人が、地ひびきするほどの音を立ててのけさまにうしろにひっくりかえつた。いうまでもなくバナナの皮に足をとられたのである。あわてて起き上ろうとし、ふたたび途中でひっくりかえつた。両手の自由のきかぬ彼は三

度四度と身もだえした。どつと、いろとりどりの笑声が、狭い市内にひびきわたった。

「馬鹿野郎！」

冷酷にのしつて、看守の手が、帯にかかり、はじめてわかものは立上ることができたのである。

笑声はなおもしばらくつづいていた。しおれたわかものが、席へもどつて来てのちも、くつくつと含み笑う、若い女などの、世にこれほどに冷酷なものも少ないであろう笑いがきこえていた。が——間もなく、それらのこえはびたりとやんでしまった。かつてない静けさに車内はしんとひそまりかえった。

若いかの囚人の口をもれて、すすり泣きのこえがきこえてきたのである。喰いしばった歯のすきまから、それはもれて来た。はじめはおさえにおさえた低い音だったが、ついにそれはおさがたくどつとあふれた。子供のような嗚咽おとぎのこえがしだいに高くなつて行くのであつた。涙のしずくが頬をつたわった。ふとみる、彼の頭の耳に近いあたりには、倒れた拍子に座席のかどにうちつけたものだろう、髪の毛の上に血さえにじんでいる。手錠の喰いこんだ手首は、起き上ろうともだえた時に傷ついたものだろう、いたいたしく皮がむけ、ここにも血しおがふきでている。……

④ 汽車は走り、車輪のひびきはごうごうと今しも鉄橋を越えた。そのひびきのあいまに、すすり泣きのこえはなおもきこえる。敵愾なものに打たれて車内にはコトリとの音もしなかった。私は硬こばつた真言まことな顔をして、彼ひとり今なお平然たるかの肥火漢の横顔を喰い入るように見すえていた。富んで無智なるものの、冷酷さ、残忍さを見ること、今までに私は必ずしも少なしとはしない。しかしこの時ほどにはげしいいきどおりに身を灼やいたことはいまだかつてなかったのである。

* 検査——二十歳に達した成年男子が義務づけられていた徴兵検査。

* 請負師——下請けの職人たちを束ねる役目を果たす仕事。

問一 傍線部①「心の喜び」とあるが、「私」は若者がどのような「喜び」を感じていると考えているのか、わかりやすく説明しなさい。

問二 傍線部②「読もうとひろげた新聞を持つ手のふるえのどうにもとどまらぬ感情の荒立ちをおぼえた」とあるが、なぜこのように「私」は感じたのか、その理由をくわしく説明しなさい。

問三 傍線部③「幾十の射るような視線に裸にされ」とあるが、このような表現にはどのような効果があると考えられるか、説明しなさい。

問四 傍線部④「厳粛なものに打たれて車内にはコトリとの音もしなかった」とあるが、「私」は多くの乗客たちの心理をどのように考えているのか、「厳粛なもの」という表現に留意して説明しなさい。

III

次の文章は『狭衣物語』の一節で、主人公の男性が「源氏の宮」という高貴な女性のもとを訪れる場面です。これを読んで、後の問いに答えなさい。

月も立ちぬれば、暑さのわりなき頃は、いとど水恋鳥みづこひどりにも劣くせらず心一つに思ひ焦こがれたまふを、知る人なし。つれづれなる昼つ方、源氏の宮の御方に参りたまへれば、白き薄物の単衣ひとへを着たまひて、いと赤き紙なる書ふみを御覧みすとて、そばみて居たまへるに、御額みづかみのゆらゆらとこぼれかかりたまへるに、裾はやがて後ろと等しく引かれゆきて、いとあえかなる御単衣の裾にこちたげにたたなはりゆきて、裾の割きき目はなやかに見えたまへる。いづくを限りに生ひゆかんと、所せげなるものから、あてになまめかしう見えたまふ。隠れなき御単衣に透きたまへるうつくしき、いとからぬ人しもこそ多かれ、と、なほいかで心あらん人のただうち見放ちたてまつるやうはあらん、ましてかばかり御心にしみたまへる人は、見たてまつりたまへるたびごとに、胸つぶつぶと鳴りつつ、うつし心もなきやうにおぼえたまふを、よくぞ忍びたまひける。源氏の女一の宮も、いとかくばかりえこそおはせざりければや、薫大将かむだいしやうのさしも心留めざりけん、とぞ思さるる。

「いと暑きに、いかなる御書御覧みするぞ」と聞こえたまへば、「斎院より絵ども賜はせたる」とて、くまなき日のけしきには、はなばなとにほひ満ちたまへる御顔に見合はせてまつりたまひて、まばゆげに思してこの御書に紛らはしたまふ御もてなし、まみ、額髪みづかみのかかり、つらつきなど、言ひ知らずめでたし。例の、涙も落ちぬべきに、紛らはしに絵どもを取り寄せて見たまへば、在五中將の日記をいとめでたう書きたるなりけり、と見るに、あぢきなく、一つ心なる人に向ひたる心地して、目留まるところに忍びあへて、「これはいかが御覧みする」とて、さし寄せたまふまに、

よしさらば昔の跡を尋ね見よ我のみ惑ふ恋の道かは

とも、え言ひやらす、涙のほろほろとこぼるるを、あやしと思す。

*水恋鳥——アカシヨウビンのこととされるが、名前の由来は未詳。

*額髪——額に懸かる髪。前髪のこと。

*源氏の女一の宮——『源氏物語』に登場する女性。

*薰大将——『源氏物語』に登場する男性。

*在五中将の日記——『伊勢物語』。「在五中将」は在原業平を指し、『伊勢物語』は在原業平が自らのことを記したものと
も考えられていた。

問一 傍線部(ア)(ウ)の意味を述べなさい。

問二 傍線部(A)は、誰のどのような様子を述べているのか、説明しなさい。

問三 傍線部(B)を現代語訳しなさい。

問四 傍線部(C)を、動作主(主語)を補って現代語訳しなさい。

問五 傍線部(D)の和歌について、「昔の跡」が何を指しているのかを示しながら現代語訳しなさい。

IV

次の文章は、元末明初の文人劉基りゅうきがその書齋「苦齋」について述べたものです。これを読んで、後の問いに答えなさい。
ただし、設問の都合上、返り点・送り仮名を省略した部分があります。

孟子曰、⁽¹⁾「天之將降大任於是人也、必先苦其心志、勞其筋骨、

餓其體膚。」趙子曰、「良藥苦口、利於病。忠言逆耳、利於行。」⁽²⁾

彼之苦、吾之樂、而彼之樂、吾之苦也。吾聞井以甘竭、李以苦

存。夫差以酣酒亡、而勾踐以嘗胆興。無亦猶是也夫。」劉子⁽³⁾

聞而悟之、名其室曰苦齋、作苦齋記。⁽⁴⁾

(『誠意伯文集』による)

*李——すもも。

*夫差——春秋時代の呉の王。越の王である勾踐のライバル。

*劉子——この文章の著者の劉基。

問一 傍線部①「天之將降大任於是人也」は、「天の將に大任を是の人に降さんとするや」と読みます。この読みに従って、解答用紙の漢文に返り点と送り仮名を付けなさい。

問二 傍線部②「忠言逆耳利於行」を現代語訳しなさい。

問三 傍線部③「井以甘竭、李以苦存」を現代語訳しなさい。

問四 傍線部④「勾踐以嘗胆興」の意味をわかりやすく説明しなさい。

問五 傍線部⑤「苦齋」について、劉基がその書齋を「苦齋」と名づけたのはなぜか。冒頭の孟子の言葉を踏まえながらわかりやすく説明しなさい。